『ティファニーで朝食を』と『アルジャーノンに花束を』を研究して

佐 藤 愛

中村ゼミでは英語文学の受容をテーマに映画と翻訳を比較した。 3年次には1年間を通して『ティ ファニーで朝食を』を取り上げた。この作品はトルーマン・カポーティの作品で、映画化もされ、かな り評判になった。舞台は、ニューヨークの五番街にある有名な宝石店のティファニーである。主人公は、 自由奔放な女ホリー・ゴライトリーと彼女を見守る語り手になっている作家の「私」である。映画では 主人公のホリーをオードリー・ヘプバーンが演じ、作家の語り手をジョージ・ペパードが演じた。ホリー は金持ちの男を手玉に取り、高級な衣裳に身を包み、可愛らしい魅力のある女性である。原作者のトルー マン・カポーティはこの作品の映画化の話がきた時、主演をマリリン・モンローにしたかったらしい。 なぜなら、彼の好みは金髪で色気のある女性だったからだ。しかし、もしマリリン・モンローが演じて いたなら、ねっとりとした愛欲物語に仕上がっていたに違いない。こんなにハイセンスでおしゃれに、 いやらしさがなく軽やかに仕上がったのは、やはりオードリー・ヘプバーンだからこそである。しかし、 映画ではホリーと作家の恋物語に仕立てあげられているが、小説との中身とは異っている。最大の違い は、映画ではホリーと作家が結ばれハッピー・エンドであるが、原作は結末に自由奔放なホリーはやは り旅を続けていることになっている。私自身、映画の印象が強いせいか、原作の中のホリーにもオード リー・ヘプバーンをだぶらせてしまったが、原作の内容にも彼女の涼しさ、小粋さが合っているように 思えた。 4年次には、前期の短い間に「アルジャーノンに花束を」の原作を取り上げた。この原作は 初期のもので短く、現在翻訳されているのは長く、内容も濃くなっているが、それが肉付けされる前の 元祖の作品である。私自身、今までこれほどまでに悲しくて、切ない作品に出会ったことがない。内容 を把握して、何度読んでも胸がつまる想いである。主人公のチャーリー・ゴードンは37才で工場で一生 懸命働いている。同僚にからかわれながらもチャーリーは友達だと思い、大切につき合っている。彼は ⅠQ68しかなく、常に頭がかしこくなりたいと願っていたが、そんな望みがかなえられ手術を受け、Ⅰ Qは今までの3倍近く高くなり、大天才になった。アルジャーノンというネズミも同じ手術を受け、い つもチャーリーと競い合っていた。チャーリーは知性は得ることはできたものの、IQ68の時には知ら なかった世界まで覗かなければいけなくなってしまう。友達にからかわれていたことの恥ずかしさ、人 間関係の複雑さ、異性を意識する感情などである。アルジャーノンは弱って行き、死んでしまう。チャー リーは、昔の自分のような人達にも自分と同じ手術を受けさせてあげたいがために色々研究したいこと があったのに、彼も徐々に元に戻っていってしまう。チャーリーは心が優しく、努力家でひたむきに頑 張り、温かい人である。最も彼に合てはまる言葉は健気さであろう。結末は、チャーリーはIQ68に戻 り、今までの生活全てを捨てて、まちを出て行くという悲しい終わりだが、彼の健気さが私に勇気を与 えてくれる大切な作品である。

この2作品を研究したことが大学生活最大の満足である。

(指導教員 中村 敦志)